

論文の和文要旨	
論文題目	戦間期オーストリアにおけるナショナルツーリズム ——登山家協会と大衆運動の連係による国民形成——
氏名	古川高子

本研究は、陣営対立論に基づいて叙述された戦間期オーストリアのツーリズム史に生じた二つの陥穽を、登山家協会と大衆運動との連係から紡ぎ出されたものとしてツーリズムを捉え直すことで埋めようとするものである。陣営対立論は、第2次世界大戦後の「オーストリア国民」帰属意識形成と国家再建を担った国民党と社会党とが協調して行った政治を支える戦間期の歴史理論である。政府は、戦間期オーストリアの住民がドイツ性（＝「ドイツ国民」への帰属意識）を有し、1938年の合邦に同意したにもかかわらず、これらを否定し、ナチズムへの抵抗を「オーストリア国民」の要件にした。それは敗戦直後に受諾した「モスクワ宣言」の前半にある「犠牲者テーゼ」を強調して、「加害者ドイツ人」から厳格にオーストリア人を区分し、ナチによる抑圧や抵抗を強調することで「オーストリア国民」を創出し、政府の支配を正当化しようとしたからである。陣営対立論によれば、戦間期の社会はキリスト教社会党（改称前の国民党）、社会民主党（改称前の社会党）およびドイツナショナルが陣営を張り、周囲を巻き込みながら政治的対立・抗争した「悪い」時代であった。それゆえ権威主義的独裁やナチ支配を導くことになったが、戦後は争いのない調和的な社会、あたかも世紀転換期以来のナショナリズムが興る以前の「善き」リベラリズムの時代が蘇ったのである。陣営対立論の背景にはこのようにリベラリズムとナショナリズムの断絶論があった。そのため、戦間期のツーリズム史において本来ならば言及されてしかるべき「過去の克服」とオーストリア国民史に関する重要な論点が描かれないうまま、再構成されることになってしまった。

さて、ツーリズム史叙述における一つ目の問題は、急進的ドイツナショナル運動を率いてナチに与した登山家 E. ピヒルが、第1次世界大戦後、リベラルな教養市民層やユダヤ教徒も多く裕福で権威のあったドイツ・オーストリアアルペン協会（以下アルペン協会）オーストリア支部長となり、同支部にアーリア条項を導入した後、それをアルペン協会全体に広げようとし、さらにドイツとの合邦を導いた中心人物だとみなされたため、「過去の克服」の対象としてしか認識されず、オーストリア国民史において否定されるべき人物となった点である。だが、オーストリアナショナリズムとドイツナショナリズムは思想的に往来が可能なほど相似していた。それゆえピヒルはオーストリアのためのツーリズムを発展させたオーストリアナショナルでもあり得た。しかし、これまでの歴史はその点について触れてこなかったのである。

二つ目の問題は、ドイツナショナル陣営のピヒルとは対立し、彼が排斥したユダヤ教徒を受入れ、さらに権威主義体制やナチ体制には抵抗したとみなされた社会民主党の労働者向け登山家協会自然の友が、戦後社会党の支援を受けて再建され、オーストリアにおける労働者のためのツーリズムを広く発展させたことで、1895年の設立から党とは一枚岩だとみなされてきた点である。この組織は、実は戦間期の政治的対立が激しくなった時期におい

ても、ドイツナショナル陣営の登山家協会と密接な関係関係を維持し、さらに党の方針とは異なる思想の流れも有していた。これらについて社会主義者とナショナリストとの相違を自明視する社会民主党陣営に与する歴史家は描かずに来てしまったのである。

そこで、本論文ではアルペン協会オーストリア支部と自然の友オーストリア本部を主たる分析の対象とし、陣営対立論に代えてリベラリズムとナショナリズムの連続性および「国民への冷淡さ」から翻案した国民主義者の「政治への冷淡さ」という視角を用い、登山家たちの思想や行動を検討することにした。前者は、ツーリズムの特性を明らかにするために行った大衆運動や登山家協会の指導層の思想や行動の分析に利用し、帰属・階層に関する排他性と包摂性を指標として提示した。多様な政治に関与した彼らの実利的行為や態度は言説レベルでも残されたため、上記指標を用いることができたが、登山家協会の普通会员である労働者層青年登山家は、多くの場合、政治には関与せず、さらに言説をほとんど残さなかったため、連続性の理論での分析は難しかった。そこで彼らが諸種の選択肢に直面した際に示す実利的行為に政治的主体性を見いだす「冷淡さ」論を利用した。

本論ではこのような視角を用い、彼らの担ったツーリズムにはドイツ性ばかりでなくオーストリア性（＝「オーストリア国家」「オーストリア人 Österreicher」への帰属意識）やリベラリズムの特性が存在したことを実証し、陣営対立論による戦間期社会像とは異なる像を構築しようとした。そうすることで、これまで非合理かつ政治優先の行動をしたとみなされてきた登山家が、むしろ登山を行うために「ドイツ国民・民族」あるいはオーストリア人といった帰属に関する言説を用い、政治的陣営を越えて関係していたことが判明した。そこで彼らが作り上げたツーリズムを「ナショナルツーリズム」と名付け、これを担った登山家の間にナチズムへの賛同が生じた可能性を追究した。その際、戦後社会の国民形成や国家再建に大きな役割を果たすことになったツーリズムの原型を二つの型に分けて考察した。すなわちナショナルツーリズムを含み、自由主義時代から世紀転換期にかけて登山推進と登山家擁護のために設立された登山家諸協会が担った「協会型ツーリズム」、および戦間期からナチ期にかけて大衆運動から体制化した自治体・政府が、国民の身体育成のために登山を用い、登山家を国家的象徴として利用する「政府介入型ツーリズム」である。これらが重なり合いながらそのまま戦後のツーリズムへと流れ込む過程を明示することで戦後の国民形成の一つのあり方を照射し、「過去の克服」が再考されるべきことを主張した。

このような過程を明らかにするために、「ツーリズム」概念の再定義からはじめ「ドイツナショナリズム」「アルピニズム史」「オーストリアにおける労働運動研究」「労働運動文化・労働者文化・労働者スポーツ」「協会の組織構造」「環境保護の思想」という六つのテーマに関する研究史を提示し、課題群を引き出した。以下、4部構成の各部を説明し、最後に結論を提示する。

4章構成の第I部「リベラルツーリズムからナショナルツーリズムへ」では、ピヒルの政治的思想とツーリズムに焦点を当て、彼が急進的ドイツナショナルであったばかりではなく、19世紀後半に確立されたリベラルツーリズムからもその思想や活動を維持していたことを明らかにした。アルペン協会が牽引したこのツーリズムは、ブルジョワ登山家が自己鍛錬、教養習得のために登山を行うことで山地が開発され、現地住民の経済的水準が上がり、啓蒙・近代化が促進されると主張した。だが第1次世界大戦を経て登山家協会が全体として国民化する一方で、登山人口の増加が大衆登山を広げたため、これまで登山家協会が維持してきた諸権利が脅かされるようになった。これを嫌ったアルペン協会は階層的排他性を有する登山を維持し、特にピヒルは彼自身が関与した全ドイツ運動の防衛協会思想と山岳戦を指導した経験とをツーリズムに結びつけ、アルペン協会を防衛協会、その登山家を「防人」として山地を防衛させる「アルプス防衛構想」を実現しようとした。そこには同時に、裕福な「ドイツ人」をオーストリアに招来してツーリズムを盛んにし、山地住民の経済的發展を果たそうとする思想も含まれていた。ピヒルの役割は臣従者を保護する権威主義的「父親」兼総指揮官であり、そのような彼の思想は権威

主義的なオーストリア支部にも馴染み、また彼が有した全ドイツ思想はキリスト教の宗派を異にする点を除いて、権威主義体制政府の総ドイツ思想に相似していたため、これにも同意し得た。このようにしてピヒルはナショナルツーリズムを率い、オーストリアナショナルとなったのである。

第Ⅱ部では、ピヒルによって進められたナショナルツーリズムに対抗した自然の友が、第Ⅰ次世界大戦直後まで模倣・依拠してきたアルペン協会から戦間期の「赤いウィーン」を率いる社会民主党へとその頼る相手を代替させながら労働者向け登山を発展させようとしたツーリズムを「対抗ナショナルツーリズム」と名付け、5章に分けて論じた。自然の友は、第Ⅰ次世界大戦後の経済危機から立ち直ろうとする矢先にアルペン協会オーストリア支部から適用されていた小屋利用料金割引制度が停止されたことで、自力で小屋建設を行う必要に迫られた。資金難だったウィーン本部は、党からの支援に頼って協会構造の変革を行い、そのため同党のドイツ性やオーストリア性を示す階層包摂的な国民化思想・活動を受容していく。だが、リベラルツーリズムで学んだ階層的排他性を含みリベラルな価値観は手放さず、登山家協会として活動するために「政治的中立」を標榜し、政治的対立の時期にもブルジョワ登山家協会との二重会員を維持した。その上、高山登山を実現するために、アルプスから遠く共産党との対立に直面していたドイツ諸支部にオーストリア・アルプスに小屋を建てるよう強要し、小屋建設の困難な支部を排他的に扱うなど、登山とそのため財を最優先する姿勢を貫いた。

同じく5章からなる第Ⅲ部「登山家たちの「大ドイツ共同体」」では登山家協会の主たる営為であった登山活動や登山思想を自然の友を中心にして検討した。第Ⅰ次世界大戦中・後における山地の近代化は登山や登山家に正負の両面から大きな作用を及ぼした。戦間期にはインフラや諸権利が整い、貧しい青年登山家の登山は可能となったが、山岳戦での体験からドイツ人登山家としての共属意識と排他的意識も強まった。いずれの登山家協会も同様な意識を持って優秀な後継者を育成しようとし、政治的対立が深まった時期においても救援活動やガイドの組織化など協会相互の共同活動を続けた。自然の友の後継組織もブルジョワ登山家諸協会との繋がりから生まれたともいえるほどだった。このように登山を最上位に置く実利的登山家たちは、政治によって生まれた登攀時の障害を実務レベルで取り除く努力を行う際に、帰属を表現する言説や政治を利用した。その一方で、ナチ時代においてさえ政府の方針である登山の民主化・国民化とは異なる従来からの階層的排他性を含む諸制度を維持していた。この一例からもわかるように、登山家たちは合邦という政治的目的を優先していたわけではなく、登山を行い易くするためにむしろ政治を利用していた。よって、彼らが「大ドイツ共同体」を求めていたとするならば、それは政党政治には依拠しない登山のための登山家のみからなる意識上の共同体だったといえよう。

第Ⅳ部「「オストマルク」ツーリズムから戦後ナショナルツーリズムへ」では、戦間期の展開部としてナチ時代から戦後社会のツーリズムを扱った。ナチ期には全ドイツ思想へと再びスイッチングしたピヒルは、小屋や自然を財とみる発想をもって「アルプス防衛構想」から「オストマルク」の領域を構想した。「オストマルク」出身の登山家である「防人」に実践で「ドイツ・ライヒ」に貢献させ、「オストマルク」の意義を高めて「総統」からの承認を得ようとする一方で、「オストマルク」を登山中心のツーリズムで経済振興させようと考え、行動していた。ここからナショナルツーリズムの延長上に「オストマルク」ツーリズムがあったことが判明し、オーストリアナショナルとしてのピヒルがここでも立ち現れた。他方、自然の友で登山家教育を受けた優秀だが貧しい青年登山家カスパレークは、自然の友時代からブルジョワ登山家協会の青年登山家と共同登山を行い、自然の友解散後にはアルペン協会の一支部内で元自然の友会員の社会民主党員が創設した精鋭部隊へと移籍し、ナチ時代にアイガー北壁初登頂という偉業を成し遂げた。彼の業績を認めた政府が差し出した武装親衛隊の職を受け取り、「ドイツ・ライヒ」や「オストマルク」を護り、また山岳戦を闘う兵士のための登山学校の教官となったゆえ、ピヒルの「防人」に加えられる可能性もあった。だが、彼はスペイン内戦時の国際義勇軍の山越えを手助けし、またナチを賞賛する言説を持たなかったため、北壁登攀記出版の際にはアルペン協会に属すピヒルに近いナ

チ党員のゴーストライターに頼った。このように国民主義者の「政治に対して冷淡」だった彼の实利的行動から、当時のツーリズムが、登山家を保護し、意識と制度の両面で階層的排他性を維持する協会型ツーリズム、および政府が登山・登山家に介入する階層的包摂性を持つ政府介入型ツーリズムの二つがあることが判明した。後者は戦間期「赤いウィーン」で開始され自然の友も協力した国民の身体育成政策を嚆矢として、権威主義体制時代からナチ時代へと連なる政府のスポーツ・余暇組織を主たる担い手として維持された。通史的に観ればそこに「ナチ・ドイツ」も含まれるものの、機能は戦間期から変わってはいなかった。そこに連綿と続く協会型のナショナルツーリズムが重なってナチ期に発現したのであるから、同時期のツーリズムを「第3帝国のツーリズム」として無視するわけにはいかない。しかし、オーストリアナショナルとしてのピヒルの「過去の克服」は行われず、自然の友側もそのドイツ性や複数の労働者青年登山家がカスパレークと同じく精鋭部隊へと移籍しナチとなったことも伏せ、党ともども「過去の克服」とは無関係という態度を取り続けた。それゆえアルピニズムの「過去の克服」は行われるも、オーストリアのツーリズムとしての「過去の克服」は行われないままだったのである。

オーストリアは戦後、国民国家を確立させ、「国民」意識を高めるために国家も登山家協会も一致してツーリズムの促進に向かい、それまで登山家協会が果たしていた山地開発やインフラ整備を政府が本格的に支援して代替し、登山家協会もそれぞれが依拠する政党に近寄せた。そこでは階層的排他性を埋めるために登山家が信条の異なる大衆運動や政府が提供するサービスを求めて「冷淡さ」を示す必要はなくなった。なぜなら階層的排他性を特徴とした協会型ツーリズムは、国民化プロセスの強化や経済・消費社会の発展の中で、階層的包摂性を特徴とする政府介入型ツーリズムへと限りなく近づき、政府介入型ツーリズムも階層的排他性を補おうとしたからである。その階層的排他性が何らかの形で消失して大衆型ツーリズムへと至れば、登山家協会は残るも協会型ツーリズムの役割は終わる。「経済の奇跡」とともにオーストリアのツーリズムが本格的に大衆化し、大分経ってから「過去の克服」が組上にのぼったのであるから、二重のツーリズムは気づかれないうままだったのである。合邦を通じてオーストリアをツーリズムで発展させることを望んだピヒルの政治的野望は達成されたが、ナショナルな希望は埋もれたまま目の見えず、彼自身オーストリアの独立直前にこの世を去った。これに対して、生活をするため、そして登攀という自己実現を続けるために、ナチ登録簿からの抹消を申請したカスパレークの行為は、本人の意思とは無関係に高い業績を挙げた登山家の「国民」への「名のり」とみなされ、国家も社会もその登山家を英雄的国民として「名付け」ていく。「冷淡さ」はこうしてより上位のものへと回収されたあげくに、消費行動の一つとしてみなされるようになったのである。